

## からだを通して学ぶひらかれた舞踊学—カラリパヤットを事例に

高橋京子

「非常に興味深く、しかし身体運動という、時空間にあらわれる現象を言語化し、論じるという難しさを持つ領域を対象とする学際的学問を、一言で総称するものが舞踊学」(遠藤保子他編著 2011『舞踊学の現在』文理閣、p. ii)という立場に立つとすれば、舞踊学研究の対象は広範囲の身体表現に及ぶ。一般に舞踊(ダンス)という枠組みで表現されないもの、例えばマーシャルアーツ(武術、格闘技)もその対象に含まれると発表者は考えている。

本発表で対象とするカラリパヤット Kalarippayattu は、インド、ケーララ州を発祥とするマーシャルアーツである。ヒンドゥー教と土着の信仰を基盤にし、かつては戦士の軍事訓練でもあった型を有するマーシャルアーツで、現在では自己防衛、ヘルスケア、身体表現、身体エクササイズ、スポーツという要素を含むものと捉えられる。カラリパヤットのことを、伝承地の人々は決してダンスとは言わない。しかしながら、幼少からクラシックバレエを学び続けてきた発表者にとって、カラリパヤットはからだの使い方の点で驚くほどバレエと共通していた。最初はからだ中が筋肉痛になり、階段も降りられないような日々だったが、日が経つにつれ、バレエで使うよう指導され続けてきた部位のみが筋肉痛になったのである。歴史的背景からみても、両者に接点があったとは決して思えない。けれども共通したからだの使い方をする身体表現がここにあった。からだを通して学ぶことの重要性を体感したのはこの時である。

ところで、どうしてカラリパヤットを研究するようになったのか。最初は同州に伝承されるテイヤム儀礼のフィールドワークのため現地へ赴いた。テイヤム儀礼では舞踊の際アクロバティックな身体動作があり、その儀礼の担い手たちが幼少時にカラリパヤットを学ぶという一節を本で目にした。これがきっかけで、カラリパヤットとは何ぞやという好奇心を抱くことになる。加えて、当時の指導教官の「自ら体験できるものとはとにかく体験してみる」というご指導に従って、カラリパヤットを体験し、研究するに至ったというわけである。

舞踊学の魅力は、からだを通して学べることだと思う。発表者はカラリパヤットを舞踊人類学の立場から研究してきた。現地へ足を運ぶという舞踊人類学的手法では時間もかかる上に言語化して論じるという困難があるものの、それ以上に新たな発見を得られた喜びの方が大きかった。舞踊学とは、調査者自身の生身のからだを通して学べる、人の数だけ可能性のある、ひらかれた学問である。例え対象が消えゆくものや、体験できないものであったとしても、現地へ赴き、伝承者や対象と直に接し、調査者自身の五感、さらには第六感を総動員して理解しようと試みるからこそ、舞踊学の醍醐味であると感じている。

高橋京子

フェリス女学院大学文学部准教授

博士（社会学）

学歴：

2001 年お茶の水女子大学文教育学部芸術・表現行動学科舞踊教育学コース卒業

2003 年お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人文学専攻舞踊・表現行動学コース博士前期課程修了

2008 年 3 月立命館大学大学院社会学研究科応用社会学専攻博士課程後期課程修了

主な著書：

（単著）『日本とインドにおける疱瘡治癒祈願の舞踊研究—グラフノーテーションによる動作分析を中心に—』早稲田大学出版部 2011 年

研究分野：

日本、インドを中心とする病気治癒、健康にかかわる身体表現（舞踊、マーシャルアーツ）の舞踊人類学・スポーツ人類学研究